

高齢者のコミュニケーションと 生きがいに関する研究 —SNS利用に着目して—

橋本 成仁¹・山下 壮太²・海野 遥香³

¹正会員 岡山大学大学院准教授 環境生命科学研究科 (〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1-1)

E-mail: seiji@okayama-u.ac.jp

²学生会員 岡山大学大学院 環境生命科学研究科 (〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1-1)

E-mail: pwds91n6@s.okayama-u.ac.jp

³学生会員 岡山大学大学院 環境生命科学研究科 (〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1-1)

E-mail: p8o93ulp@s.okayama-u.ac.jp

我が国では、老後に不安が感じられるものとして「生きがいの問題」が挙げられており、老後の生活を生きがいがあるものにすることが喫緊の課題となっている。また、会話の頻度や近所づきあいが少ない人において生きがいを感じていないことが明らかになっている。

そこで本研究では、生きがい意識尺度 (Ikigai-9) を用い、コミュニケーションの中でも特にSNS利用に着目し生きがいとの関連性の把握を行った。まず、生きがい得点と各要素との関連性の把握を行い、コミュニケーションとSNS利用が生きがい得点と関連があることを確認した。そして、生きがい得点を目的変数としたモデルを作成した結果、総合的なコミュニケーション満足度がSNSの利用の有無にかかわらず生きがいを構成する重要な要素であることが示された。

Key Words : *the elderly, communication, sns, purpose in life*

1. 背景と目的

近年、我が国では高齢者人口が急速に増加している。令和元年版高齢社会白書¹⁾によれば、総人口に占める65歳以上人口の割合(高齢化率)は28.1%となり、増加する高齢者に関する様々な社会問題に対応することが喫緊の課題である。平成28年版厚生労働白書²⁾では、老後に不安が感じられるものとして、健康上の問題、経済上の問題に続き「生きがいの問題」が挙げられている。よって、急速な高齢化が進む我が国において、高齢者の生活をいかに活力にあふれ生きがいがあるものにするかが大きな課題となっている。高齢者を対象とした社会調査は多く実施されており、高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査³⁾では、会話の頻度や近所づきあいが少なく、困った時に頼れる人がいない人において生きがいを感じていないことが明らかになっている。つまり、他者とのつながりやコミュニケーションの質・量の差が高齢者の生きがいに関連しているのではないかと考えられる。

近年ではこのような他者とのつながりやコミュニケーションの新たな形態として、ソーシャルネットワークサービス (Social Networking Service : 以後SNS) が普及している。SNSは、他人と情報を共有したり、メッセージ機能によりコミュニケーションを行うことができるなどの機能を有するサービスである。我が国ではスマートフォンの普及とともに特に若者の間でSNSの利用者が増加していった。しかし、平成30年通信利用動向調査⁴⁾によると、60歳以上79歳以下のインターネット利用者のSNS利用も増加傾向にあることから、今後は高齢者においても普及していくと考えられる。また、平成30年版情報通信白書⁵⁾では、SNSの利点として新しいつながりの創出や既存のつながりの強化が挙げられており、SNSは高齢者の生きがいに関する問題の要因として挙げられている他者とのつながりやコミュニケーションの新たな形態だと考えられる。よって、高齢者の生きがいとコミュニケーションやSNS利用について関連性の把握が必要であると考える。

高齢者の生きがいに関する既存研究として、野村ら⁶⁾は、高齢者の生きがいの概念の用法と構造について、言語辞典、生きがいに関する書籍、研究論文をもとに高齢者の生きがい概念の属性を抽出したうえで、高齢者の生きがいを定義している。条川ら⁷⁾は、行政による高齢者の生きがい対策の具体的内容を調査し、高齢者の精神的多様性の視点から考察して、生きがいデザインの今後の方向を検討した。今井ら⁸⁾は、60歳以上の退職者を対象として、「生きがい概念」の構造(仮説)を構築してその仮説を検証し、SWB主観的幸福感(Subjective Well-being)との相違点を考察している。長谷川ら⁹⁾は、高齢者における生きがいの有無と家族構成や生活機能ならびに身体状況との関連について、農村地域と大都市近郊ニュータウン地域において比較した。

コミュニケーションに関する既存研究として、岡本¹⁰⁾は、地域に居住する高齢者を対象に主観的幸福感と生活習慣の種々の生活関連要因との関連について検討を行った。広田¹¹⁾は、ソーシャルネットワークの枠組みに基づいて、農村高齢者のコミュニケーション・ネットワークについて検討を行い、農村地域高齢者は近隣関係や友人関係よりも、親族中心のコミュニケーション・ネットワークを持つ傾向が強くなることを明らかにした。

その中でも、インターネットを利用したコミュニケーションに関する研究には以下のようなものがある。大木ら¹²⁾は、仮想対人ストレス(インターネット上での対人交流の増加によって生じるストレス)とネット利他(インターネットツールを使用した利他的な動機に基づく情報発信)というインターネット上の対人交流に着目し、孤独感やQOLに対するネット利他の向上効果は仮想対人ストレスによる悪影響を上回ると明らかにした。澤岡ら¹³⁾は、高齢者の非親族との電子メールを介した交流の特性について、インターネット調査のデータを用いて分析し、多くは電子メールを介した非親族である他者との交流を有しており、男性より女性で親密な他者との間でメールを介した交流が行われ、携帯電話を介してつながりを維持していることが示された。古谷ら¹⁴⁾は、対面、携帯電話、携帯メールの3つのメディアを用いたコミュニケーションについて調査を行い、あらゆるメディアを使用可能な近距離の友人や、関係期間の短い友人関係については、対面でのコミュニケーションの重要性が認められ、近距離友人関係や関係期間の長い遠距離友人関係の場合に携帯メールでのコミュニケーションにより関係を維持できる可能性があることが示された。岡本ら¹⁵⁾は、コミュニケーション相手との親密度の違いによるメディア・コミュニケーション観の差異を、3種類のコミュニケーション形態(対面、携帯電話、携帯メール)で比較検討し、各コミュニケーション形態で親密度の違いによるメディア・コミュニケーション観の差異が一樣ではな

く、それぞれのコミュニケーションメディアが異なる性質を有していることを明らかにした。三浦¹⁶⁾らは、インターネット上でブログを書く人々が誰を対象とし、それによってブログの内容がどのように異なるのかを調査し、多様な関係性をもつ他者を指向する作者のブログ記事には不幸せな感情が表出されにくく、他者を指向しない作者のブログでは読者とのコミュニケーションが活発でないことが示された。

SNS上のコミュニケーションに関する既存研究として、松尾ら¹⁷⁾は、SNSサービスの中でmixiを対象とし、ユーザーの友人関係やコミュニティ関係の両面から分析を行い、特徴を把握している。コミュニティと友人関係は相互の関連を持っており、ユーザーは自分の友人から友人関係を広げていることや結合性が高いコミュニティではオフ会が重要な役割を果たしていることなどを示した。石井ら¹⁸⁾は、5つのSNSサービス(Twitter, Facebook, mixi, モバゲー, グリー)について、個人情報の開示が利用にどのような影響を与えているかという視点から分析を行った。個人の識別情報の開示度を高く設定することは、サービスの利用を活発にさせるとは言えないが、性別や年齢など属性情報の開示はSNSの利用を活発にさせると考えられると結論付けた。梅田ら¹⁹⁾は、大学生を対象にSNSと先行研究のWeb上での日記(以下、ウェブ日記)の結果を比較し、大学生のSNS利用にはどのようなコミュニケーション形態があるのか検討した。大学生のSNSでのWeb日記は自己表現ではなくコミュニケーションに重きを置いていることは従来のBlogと一致しているが、SNSでは実際の友人との交流に強く主体を置くタイプが存在し、従来のBlogとは異なるコミュニケーションを行っているのではないかとすることを明らかにした。大竹ら²⁰⁾は、既存の友人関係が少ない環境の一例としてソーシャルゲームを取り上げ、新たな友人関係の形成を支援する手法の検討およびその際に必要となる機能の提案を行った。実際のSNSおよびソーシャルゲームユーザを対象に評価実験を行った結果、提案した機能の有効性が確認され、新たな友人関係形成を行うことができる可能性を明らかにした。

高齢者の生きがいに関する研究は、健康状態や家族構成などから生きがいを把握したものや文献調査を行ったものが多く、コミュニケーションとの関係性を調査したものは少ない。また、インターネットやSNS上のコミュニケーションに関する研究は、主に大学生を対象としたものが多く、高齢者を対象として研究を行ったものはない。さらに、コミュニケーションとSNSの両者に着目し、高齢者を対象として行った研究は見られない。

以上より本研究では、高齢者のコミュニケーションの中でもSNS利用に着目し、生きがいとの関連性の把握を行う。また、コミュニケーションやSNSのみならず余暇

活動や生活満足度など、生きがいに関連があると思われる他の要素についても分析を行い、高齢者の生きがいの構成要素を把握することを目的とする。

2. 調査対象SNSとアンケート調査概要

SNSの分類について図-1に示す。平成30年版情報通信白書⁹⁾では、SNSを大きく「広場型」と「フィード型」に分類している。広場型は、運営者がコミュニケーションの場を設定し、そこに参加者が特定のテーマに関する情報を投稿するものであるとされている。フィード型は、参加者が投稿する様々な情報が一覧となって表示されるSNSであり、参加者同士の情報のやり取りによってつながりが生じるものであるとされている。

今回の調査では、フィード型の中でもここ10年の間で我が国において利用者が増加したTwitter、Facebook、Instagramの3種類を調査対象とする。LINEは個人の間で行われるメールのやり取りと類似しており、上記3つのSNSに見られる情報のシェアの要素が少ないため、SNSとして扱わないこととする。

また、SNSの利用法として、投稿、閲覧、情報のシェア、ダイレクトメッセージ（以下：DM）やメッセージャーのやりとりの4つに着目する。DMやメッセージャーは、自分がフォローしている相手に対しメッセージを送ることができる機能であり、TwitterとInstagramではDM、Facebookではメッセージャーを利用してメッセージのやり取りを行う。

本研究で行ったアンケート調査の概要を表-1に示す。全国を対象としたWebアンケートを行い、調査対象年齢は65歳以上80歳未満としている。また、事前にスクリーニングを行い、SNS利用者とSNS非利用者のサンプルを

約半数ずつ取っている。

アンケート回答者の年齢構成比を図-2に示す。65歳以上75歳未満の割合が約8割であり、75歳以上80歳未満の割合は約2割となった。性別に関しては、SNS利用者とSNS非利用者同様にスクリーニングを行い、約半数ずつサンプルをとっている。

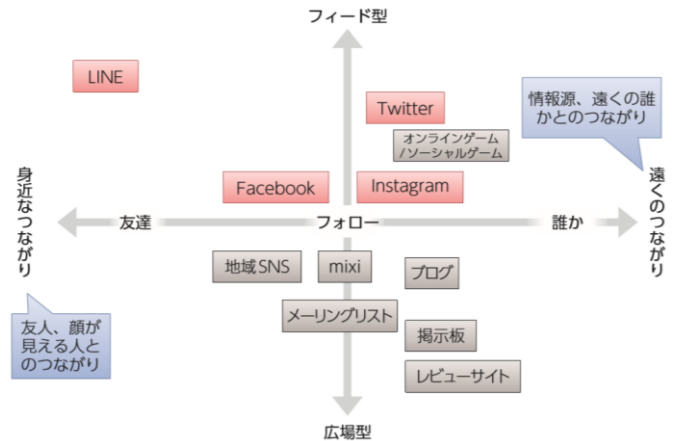


図-1 平成30年版情報通信白書によるSNSの分類

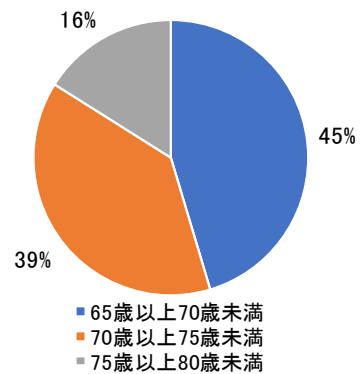


図-2 アンケート回答者の年齢構成比

表-1 アンケート調査の概要

調査名 高齢者のSNS利用とコミュニケーションに関する調査				
調査方法	Webアンケート			
調査時期	2020年1月			
調査対象地域	全国			
調査対象者	SNSを週1日以上利用している男性	SNSを週1日以上利用している女性	SNSを週1日未満利用、もしくは利用していない男性	SNSを週1日未満利用、もしくは利用していない女性
	132人	132人	133人	132人
総数	529人			
主な調査項目	<ul style="list-style-type: none"> ●個人属性 ●SNS利用状況及びSNSの投稿・閲覧に関して ●対面コミュニケーションの実施状況及び満足度 ●テキストコミュニケーションの実施状況及び満足度 ●生きがい意識尺度(Ikigai-9)を用いた生きがいの測定 ●ソーシャルキャピタルを用いた地域とのかかわり具合の測定 ●余暇活動実施状況及び満足度 ●移動状況 ●生活満足度 			

調査項目としては個人属性、SNS利用状況及びSNSの投稿と閲覧に関して、対面でのコミュニケーション（以下：対面コミュニケーション）の実施状況及び満足度、メールやLINE、TwitterとInstagramのDM、Facebookのメッセージなどを用いたコミュニケーション（以下：テキストコミュニケーション）の実施状況及び満足度、生きがい測定する尺度として今井ら²¹⁾が作成した生きがい意識尺度（Ikigai-9）を取り入れている。また、高齢者の生きがいを構成している要素の把握を行うため、地域とのかかわり具合を把握することができるソーシャルキャピタルや余暇活動実施状況及び満足度、移動状況、生活満足度を質問項目に組み込むこんでいる。

3. 生きがい意識尺度（Ikigai-9）の概要

生きがいを測定する既存の尺度として、近藤²²⁾らによって作成された生きがい感スケールは16項目、長谷川ら²³⁾によって作成された生きがい対象尺度は24項目、Lawton²⁴⁾が開発したPGCモラールは17項目から構成されている。一方、今井ら²¹⁾によって作成された生きがい意識尺度 Ikigai-9（以下：Ikigai-9）は9項目から構成されている。また、Ikigai-9は肯定的な質問のみで構成されており、対象者の心理的負担が少ない。さらにIkigai-9は都市計画分野や作業療法研究分野で使用されており、例えば樋口ら²⁵⁾、原田ら²⁶⁾の事例がある。

以上より本研究では、生きがいを測定する尺度として今井ら²¹⁾によって作成されたIkigai-9を用いている。Ikigai-9の調査項目を表-2に示す。Ikigai-9は、3つの下位尺度から構成される。下位尺度Ⅰ「生活・人生に対する楽天的・肯定的感情」、下位尺度Ⅱ「未来に対する積極的・肯定的姿勢」、下位尺度Ⅲ「自己存在の意味の認識」はそれぞれ3項目から構成される。

回答は5件法（5. とてもあてはまる～1. ほとんどあてはまらない）で求め、各素点を合計して総得点（範囲9～45点）及び各下位尺度得点（範囲3～15点）を算出する。得点が高いほど生きがい意識が良好であること、すなわち現状の生活・人生に対して楽天的で肯定的な感情

表-2 Ikigai-9の調査項目

Ikigai-9調査項目	
下位尺度Ⅰ（生活・人生に対する楽天的・肯定的感情）	自分は幸せだと感じる事が多い
	ここにゆとりがある
	生活がゆたかに充実している
下位尺度Ⅱ（未来に対する積極的・肯定的姿勢）	何か新しいことを学んだり、始めたいと思う
	色々なものに興味がある
	自分の可能性を伸ばしたい
下位尺度Ⅲ（自己存在の意味認識）	自分は何か他人や社会のために役立っていると思う
	自分の存在は、何かや、誰かのために必要だと思う
	自分は誰かに影響を与えていると思う

を感じていること、自分の未来に対して積極的で肯定的な態度を持っていること、他者（社会）との関係において自分の存在を肯定的に認識していることを意味する。

図-3に今回のアンケート結果で得られた生きがい得点の集計結果を示す。

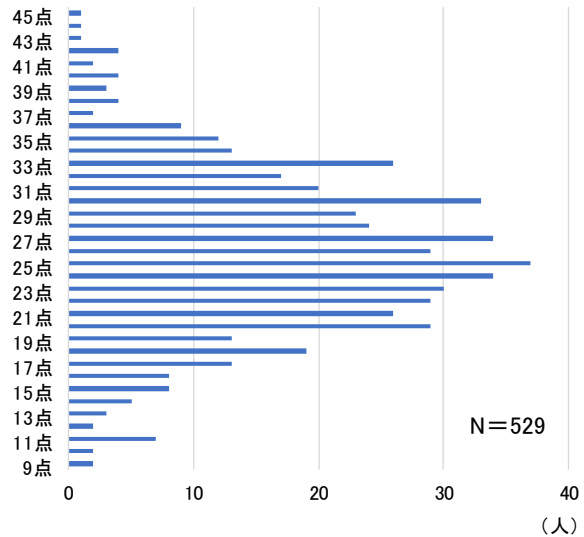


図-3 生きがい得点の集計結果

4. 生きがい向上に関連する要素の分析

本章では、Ikigai-9を用いた結果を基に、生きがいの向上に関連する要素の分析を行う。生きがい得点は、下位尺度得点を算出し、その後クラスター分析を行うことで回答者を4つのクラスターに分類した。下位尺度がすべて高いものを生きがい得点（高い）と名付け、そこから順に（やや高い）、（やや低い）、（低い）と名付けた。クラスター分析の結果を表-3に示す。そして、各要素と生きがい得点とのクロス集計を行うことにより、生きがいとの関連性の把握を行った。なお、独立性の検定の結果及び、そこで有意な差が見られた場合については残差分析の結果を併せて示す。

表-3 生きがい得点に関するクラスター分析の結果

クラスター名	N	下位尺度Ⅰ（生活・人生に対する楽天的・肯定的感情）	下位尺度Ⅱ（未来に対する積極的・肯定的姿勢）	下位尺度Ⅲ（自己存在の意味認識）
生きがい得点（高い）	71	12.859	12.817	12.789
生きがい得点（やや高い）	185	11.432	10.032	10.000
生きがい得点（やや低い）	196	8.551	8.883	8.051
生きがい得点（低い）	77	6.792	5.662	6.039

(1) 個人属性と生きがい得点の関連性

個人属性と生きがい得点とのクロス集計の結果を表-4に示す。性別、年齢、現在の職業、居住地域（都市部・郊外部・中山間地域）、半径100メートル以内の世帯数に関しては、独立性の検定の結果、統計的に有意な差が見られなかった。

世帯の経済状況満足度、自身の健康状態満足度、自身の時間的な余裕の満足度、スマートフォンの利用の有無、利用している情報通信機器の数に関しては、有意水準1%で統計的な差が認められた。世帯構成、パソコンの利用の有無に関しては有意水準5%で統計的な差が認められた。世帯の経済状況と自身の健康状態、自身の時間的な余裕については、いずれも満足しているほど生きがい得点が高く、不満なほど生きがい得点が低いことが明らかとなった。世帯構成に関しては、二人以上である方が生きがい得点が高くなることが分かった。情報通信機器については、スマートフォンやパソコンを利用していると生きがい得点が高いこと、そして利用している情報通信機器が多いほど生きがい得点が高いことが明らかとなった。

表-4 個人属性と生きがい得点

	生きがい得点				P値
	高い	やや高い	やや低い	低い	
世帯の経済状況					0.0000 **
満足(N=56)	23.9%	18.4%	1.5%	2.6%	
やや満足(N=179)	49.3%	45.4%	25.5%	13.0%	
どちらでもない(N=152)	18.3%	26.5%	34.7%	28.6%	
やや不満(N=99)	4.2%	8.1%	25.5%	40.3%	
不満(N=43)	4.2%	1.6%	12.8%	15.6%	
自身の健康状態					0.0000 **
満足(N=58)	25.4%	17.8%	2.0%	3.9%	
やや満足(N=218)	53.5%	50.8%	36.7%	18.2%	
どちらでもない(N=132)	12.7%	19.5%	33.2%	28.6%	
やや不満(N=89)	7.0%	10.3%	20.4%	32.5%	
不満(N=32)	1.4%	1.6%	7.7%	16.9%	
自身の時間的な余裕					0.0000 **
満足(N=389)	93.0%	86.5%	63.3%	50.6%	
どちらでもない(N=111)	7.0%	12.4%	28.6%	35.1%	
不満(N=29)	0.0%	1.1%	8.2%	14.3%	
世帯構成					0.0312 *
一人暮らし(N=82)	11.3%	11.4%	17.3%	24.7%	
二人以上(N=447)	88.7%	88.6%	82.7%	75.3%	
スマートフォンの利用の有無					0.0083 **
利用している(N=322)	74.6%	64.9%	55.6%	51.9%	
利用していない(N=207)	25.4%	35.1%	44.4%	48.1%	
パソコン利用の有無					0.0373 *
利用している(N=484)	98.6%	92.4%	90.3%	85.7%	
利用していない(N=45)	1.4%	7.6%	9.7%	14.3%	
利用している情報通信機器の数					0.0024 **
1, 2種類(N=105)	14.1%	16.2%	19.9%	33.8%	
3, 4種類(N=369)	66.2%	74.1%	69.9%	62.3%	
5, 6種類(N=55)	19.7%	9.7%	10.2%	3.9%	

独立性の検定 ** : 1%有意 * : 5%有意
 クロス集計の残差分析 下線 1%有意 : 5%有意
 青字 割合が高い 赤字 割合が低い

(2) 対面コミュニケーションと生きがい得点の関連性

対面コミュニケーションに関する項目と生きがい得点とのクロス集計の結果を表-5に示す。対面コミュニケーションの頻度と対面コミュニケーションの満足度に関しては、独立性の検定の結果、いずれも有意水準1%で統計的な差が認められた。対面コミュニケーションを行うほど、そして対面コミュニケーションの満足度が高いほど生きがい得点が高いことが明らかとなった。

また、過去一週間で孫やひ孫、親戚、近所の人、趣味や余暇活動の友人・知人、公的機関・お店・専門職の人と対面コミュニケーションを行ったかについて、独立性の検定を行ったところ、公的機関・お店・専門職の人については有意水準1%で、それ以外については有意水準5%で統計的な差が認められた。いずれの相手についても、対面コミュニケーションを行っているほど生きがい得点が高いことが分かった。

表-5 対面コミュニケーションと生きがい得点

	生きがい得点				P値
	高い	やや高い	やや低い	低い	
対面コミュニケーションの頻度					0.0000 **
毎日(N=219)	56.3%	50.3%	34.2%	24.7%	
週5~6日(N=53)	11.3%	9.2%	11.2%	7.8%	
週3~4日(N=60)	14.1%	11.9%	10.2%	10.4%	
週1~2日(N=80)	11.3%	13.5%	18.4%	14.3%	
月に数日(N=48)	2.8%	8.1%	8.7%	18.2%	
年に数日(N=25)	1.4%	1.6%	7.7%	7.8%	
対面コミュニケーションを行っていない(N=44)	2.8%	5.4%	9.7%	16.9%	
過去一週間で孫やひ孫と対面コミュニケーションを行ったか					0.0134 *
行った(N=176)	78.6%	65.0%	57.0%	42.9%	
行わなかった(N=107)	21.4%	35.0%	43.0%	57.1%	
過去一週間で親戚と対面コミュニケーションを行ったか					0.0254 *
行った(N=111)	29.0%	28.0%	19.2%	12.5%	
行わなかった(N=374)	71.0%	72.0%	80.8%	87.5%	
過去一週間で近所の人と対面コミュニケーションを行ったか					0.0277 *
行った(N=270)	53.6%	64.9%	49.7%	51.6%	
利用していない(N=212)	46.4%	35.1%	50.3%	48.4%	
過去一週間で趣味や余暇活動の友人・知人と対面コミュニケーションを行ったか					0.0471 *
行った(N=186)	44.9%	42.9%	36.2%	25.0%	
行わなかった(N=299)	55.1%	57.1%	63.8%	75.0%	
過去一週間で公的機関・お店・専門職の人と対面コミュニケーションを行ったか					0.0025 **
行った(N=162)	47.8%	34.9%	32.2%	17.2%	
行わなかった(N=323)	52.2%	65.1%	67.8%	82.8%	
対面で最も意思の疎通ができた人と過去一週間でメールでコミュニケーションを行ったか					0.0250 *
行った(N=183)	53.6%	38.4%	35.7%	29.7%	
行わなかった(N=293)	46.4%	61.6%	64.3%	70.3%	
対面コミュニケーションの満足度					0.0000 **
満足(N=216)	58.0%	54.7%	39.2%	23.4%	
やや満足(N=186)	36.2%	38.4%	40.9%	39.1%	
どちらでもない(N=74)	5.8%	7.0%	19.9%	37.5%	

独立性の検定 ** : 1%有意 * : 5%有意
 クロス集計の残差分析 下線 1%有意 : 5%有意
 青字 割合が高い 赤字 割合が低い

(3) テキストコミュニケーションと生きがい得点の関連性

テキストコミュニケーションに関する項目と生きがい

得点とのクロス集計の結果を表-6に示す。テキストコミュニケーションの頻度とテキストコミュニケーションの満足度に関しては、独立性の検定の結果、有意水準1%で統計的な差が認められた。テキストコミュニケーションを行うほど、そしてテキストコミュニケーションの満足度が高いほど生きがい得点が高くなることが分かった。

また、過去一週間で、孫やひ孫とテキストコミュニケーションを行ったかについて独立性の検定を行ったところ、有意水準5%で統計的な差が認められた。孫やひ孫とテキストコミュニケーションを行っているほど生きがい得点が高いことが明らかになった。

(4) コミュニケーション全般と生きがい得点の関連性

コミュニケーション全般に関する項目と生きがい得点とのクロス集計の結果を表-7に示す。独立性の検定の結果、全項目において有意水準1%で統計的な差が認められた。コミュニケーションに関して総合的に満足していると生きがい得点が高くなることが明らかとなった。

(5) SNS利用と生きがい得点の関連性

SNS利用と生きがい得点とのクロス集計の結果を表-8に示す。Facebookのメッセージの利用の有無、Facebookの利用状況（投稿・閲覧・情報のシェア・メッセージ）の数、SNSにおける趣味や余暇活動の友人・知人のフォローの有無に関しては、独立性の検定の結果、有意水準5%で統計的な差が認められた。SNSの利用の有無に関しては、独立性の検定の結果、有意水準1%で統計的な差が認められた。SNSにおいて閲覧のみではなく、投稿を行ったり、メッセージのやり取りを行うなど、多岐にわたって利用すると生きがい得点が高いことが明らかになった。さらにSNS利用者の方が、SNS非利用者よりも生きがい得点が高いことが分かった。

表-6 テキストコミュニケーションと生きがい得点

	生きがい得点				P値
	高い	やや高い	やや低い	低い	
テキストコミュニケーションの頻度					0.0000 **
毎日 (N=85)	28.2%	23.8%	8.2%	6.5%	
週5~6日 (N=54)	12.7%	11.4%	10.2%	5.2%	
週3~4日 (N=62)	19.7%	10.3%	11.7%	7.8%	
週1~2日 (N=112)	16.9%	27.0%	20.9%	11.7%	
月に数日 (N=85)	12.7%	10.3%	21.9%	18.2%	
年に数日 (N=36)	1.4%	6.5%	6.1%	14.3%	
対面コミュニケーションを行っていない (N=95)	8.5%	10.8%	20.9%	36.4%	0.0499 *
過去一週間で孫やひ孫と対面コミュニケーションを行ったか					
行った (N=80)	33.3%	37.4%	21.2%	19.2%	
行かなかった (N=188)	66.7%	62.6%	78.8%	80.8%	
テキストコミュニケーションの満足度					0.0000 **
満足 (N=192)	60.0%	53.0%	39.5%	29.5%	
やや満足 (N=177)	33.8%	40.9%	43.4%	46.8%	
どちらでもない (N=59)	6.2%	6.1%	21.1%	27.7%	

独立性の検定 ** : 1%有意 * : 5%有意
 クロス集計の残差分析 下線 1%有意 : 5%有意
 青字 割合が高い 赤字 割合が低い

表-7 コミュニケーション全般と生きがい得点

	生きがい得点				P値
	高い	やや高い	やや低い	低い	
コミュニケーション全般の満足度 (頻度)					0.0000 **
満足 (N=331)	85.9%	78.4%	52.0%	29.9%	
どちらでもない (N=179)	11.3%	20.0%	43.4%	63.6%	
不満 (N=19)	2.8%	1.6%	4.6%	6.5%	
コミュニケーション全般の満足度 (内容)					0.0000 **
満足 (N=341)	90.1%	81.6%	52.0%	31.2%	
どちらでもない (N=171)	9.9%	17.8%	42.9%	61.0%	
不満 (N=17)	0.0%	0.5%	5.1%	7.8%	
コミュニケーション全般の満足度 (自己表現)					0.0000 **
満足 (N=327)	95.8%	77.3%	49.0%	26.0%	
どちらでもない (N=186)	4.2%	21.1%	49.0%	62.3%	
不満 (N=16)	0.0%	1.6%	2.0%	11.7%	
コミュニケーション全般の満足度 (自分を理解してもらうこと)					0.0000 **
満足 (N=303)	90.1%	73.0%	44.9%	20.8%	
どちらでもない (N=198)	9.9%	24.9%	48.5%	64.9%	
不満 (N=28)	0.0%	2.2%	6.6%	14.3%	
コミュニケーション全般の満足度 (相手を理解すること)					0.0000 **
満足 (N=324)	90.1%	77.3%	50.5%	23.4%	
どちらでもない (N=205)	9.9%	22.7%	49.5%	76.6%	
総合的なコミュニケーション全般の満足度					0.0000 **
満足 (N=340)	93.0%	81.6%	51.5%	28.6%	
どちらでもない (N=172)	5.6%	17.8%	44.9%	61.0%	
不満 (N=17)	1.4%	0.5%	3.6%	10.4%	

独立性の検定 ** : 1%有意 * : 5%有意
 クロス集計の残差分析 下線 1%有意 : 5%有意
 青字 割合が高い 赤字 割合が低い

表-8 SNS利用と生きがい得点

	生きがい得点				P値
	高い	やや高い	やや低い	低い	
Facebookのメッセージの利用の有無					0.0207 *
利用している (N=51)	37.3%	29.4%	23.5%	9.8%	
利用していない (N=139)	16.5%	38.8%	35.3%	9.4%	
Facebookの利用状況の数					0.0108 *
1種類 (N=85)	12.9%	25.9%	45.9%	15.3%	
2種類以上 (N=105)	24.8%	38.1%	27.6%	9.5%	
趣味や余暇活動の友人・知人のフォローの有無					0.0280 *
フォローしている (N=100)	54.2%	38.5%	34.0%	22.6%	
フォローしていない (N=164)	45.8%	61.5%	66.0%	77.4%	
SNSの利用の有無					0.0071 **
利用している (N=264)	67.6%	49.2%	48.0%	40.3%	
利用していない (N=265)	32.4%	50.8%	52.0%	59.7%	

独立性の検定 ** : 1%有意 * : 5%有意
 クロス集計の残差分析 下線 1%有意 : 5%有意
 青字 割合が高い 赤字 割合が低い

次に、SNS利用者のSNSに対する意識や傾向を把握するために、因子分析を行った後にクラスター分析を行い、回答者の分類を行った。

今回は固有値が1以上となるように因子の数を決定した。その結果、因子1（積極的利用）と因子2（相手考慮）の二つに因子が分かれた。SNS利用に関する因子分

析の結果を表-9に示す。

次にクラスター分析の結果を表-10に示す。回答者を分類すると、SNS利用に関して積極的で相手考慮ができていないグループとSNS利用に関して受動的で相手考慮ができていないグループの3つに分かれた。

3つのグループに分類した回答者と生きがい得点とのクロス集計の結果を図-4に示す。独立性の検定の結果、有意水準5%で統計的な差が認められた。SNS利用に積極的で相手考慮ができていないと生きがい得点が高く、SNS利用に受動的で相手考慮ができていないと生きがい得点が高いことが明らかとなった。

(6) ソーシャルキャピタル、余暇活動、生活満足度と生きがい得点の関連性

まず、居住地域に対する意識の把握を行うため、ソーシャルキャピタル（以下：SC）の質問項目を因子分析し、後にクラスター分析を行い回答者の分類を行った。因子分析の結果を表-11に示す。固有値が1以上になるように因子の数を決定した結果、因子1（地域愛着）と因子2（地域活動参加）の二つに因子が分かれた。次にクラスター分析の結果を表-12に示す。回答者を分類すると、4つのグループに分かれた。

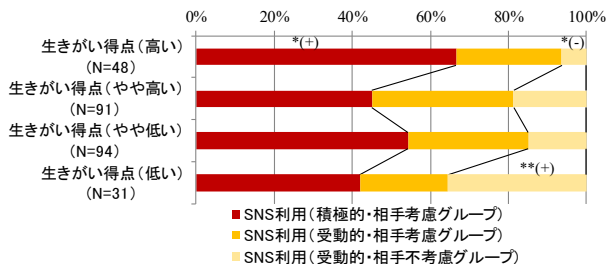
各項目と生きがい得点とのクロス集計の結果を表-13

表-9 SNS利用に関する因子分析の結果

SNS利用調査項目	
因子1(積極的利用)	投稿を行うことが好きである
	投稿に対して「いいね」や「リツイート」、「シェア」をすることが好きである
	自分の気持ちや考えを表現している
因子2(相手考慮)	相手の気持ちや考えを理解している
	友好的な態度で相手に接している

表-10 SNS利用に関するクラスター分析の結果

クラスター名	N	因子1(積極的利用)	因子2(相手考慮)
SNS利用(積極的・相手考慮グループ)	137	0.8039	0.3438
SNS利用(受動的・相手考慮グループ)	82	-0.8458	0.3259
SNS利用(受動的・相手不考慮グループ)	45	-0.9063	-1.6405



独立性の検定 P値:0.0191 5%有意
クロス集計の残差分析 **1%有意 *5%有意
(+)割合が高い (-)低い

図-4 SNS利用に関する3クラスター分類と生きがい得点

に示す。独立性の検定の結果、すべての項目において、有意水準1%で統計的な差が認められた。SCに関しては、地域愛着が高く、地域活動に積極的に参加しているほど生きがい得点が高いが、地域愛着が低く、地域活動に参加していないほど生きがい得点が高くなることが分かった。余暇活動に関しては、スポーツ・アウトドア系と施設訪問・交流・奉仕などを行っているほど、生きがい得点が高いことが明らかになった。また、余暇活動に総合的に満足しているほど生きがい得点が高くなることが分かった。生活満足度に関しては、満足であるほど生きがい得点が高く、不満であるほど生きがい得点が高いことが明らかになった。

表-11 SCの因子分析の結果

SC調査項目	
因子1(地域愛着)	地域内に友人や親類がいる
	隣人や地域住民とあいさつする
	地域の歴史や文化に関心がある
	地域の行政を信頼している
	地域の住民を信頼している
	地域内での生活に満足している
因子2(地域活動参加)	地域が好きである
	地域の清掃活動に参加している
	地域のまちづくり活動に参加している
	地域のボランティア活動に参加している

表-12 SCのクラスター分析の結果

クラスター名	N	因子1(地域愛着)	因子2(地域活動参加)
地域愛着(高)・活動積極参加型	108	0.7677	1.4217
地域愛着(中)・活動参加型	216	0.2098	0.2465
地域愛着(中)・活動不参加型	151	-0.1275	-0.9771
地域愛着(低)・活動不参加型	54	-2.0181	-1.0974

表-13 SC、余暇活動、生活満足度と生きがい得点

	生きがい得点				P値
	高い	やや高い	やや低い	低い	
SC					
地域愛着(高)・活動積極参加型(N=108)	46.5%	24.9%	12.8%	5.2%	0.0000 **
地域愛着(中)・活動参加型(N=216)	31.0%	45.4%	45.9%	26.0%	
地域愛着(中)・活動不参加型(N=151)	21.1%	27.0%	30.1%	35.1%	
地域愛着(低)・活動不参加型(N=54)	1.4%	2.7%	11.2%	33.8%	
余暇活動実施状況(スポーツ・アウトドア系)					
行っている(N=209)	45.1%	51.4%	34.2%	19.5%	0.0000 **
行っていない(N=320)	54.9%	48.6%	65.8%	80.5%	
余暇活動実施状況(施設訪問・交流・奉仕など)					
行っている(N=357)	80.3%	78.9%	61.2%	44.2%	0.0000 **
行っていない(N=172)	19.7%	21.1%	38.8%	55.8%	
総合的な余暇活動満足度					
満足(N=413)	97.2%	93.5%	64.8%	57.1%	0.0000 **
どちらでもない(N=100)	2.8%	6.5%	31.6%	31.2%	
総合的な生活満足度					
満足(N=379)	94.4%	87.6%	60.7%	40.3%	0.0000 **
どちらでもない(N=117)	5.6%	12.4%	31.6%	36.4%	
不満(N=33)	0.0%	0.0%	7.7%	23.4%	

独立性の検定 **:1%有意 *:5%有意
クロス集計の残差分析 下線 1%有意 :5%有意
青字 割合が高い 赤字 割合が低い

5. SNS利用者とSNS非利用者の生きがい得点を目的変数とした数量化 I 類分析

本章では、生きがい得点を目的変数とし、生きがい得点とのクロス集計で有意差が出た要素を説明変数とした数量化 I 類分析により、高齢者の生きがい向上に関連する要素の分析をSNS利用者とSNS非利用者に分けて行った。

(1) SNS利用者の生きがい得点に関する数量化 I 類分析

SNS利用者の生きがい得点に関する数量化 I 類分析の結果を図-5に示す。説明変数としては、総合的なコミュニケーション満足度、生活総合満足度、余暇活動（施設訪問等）の実施状況、余暇活動総合満足度、世帯の経済状況満足度、自身の健康状況満足度、SCの3クラスター分類を用いた。

まず、自身の健康状況満足度が最も影響力を持つ要素であることが示された。

次に、総合的なコミュニケーション満足度について見てみると満足であることが高得点へ影響しており、どちらでもない、不満であることが低得点へ影響していることが明らかとなった。さらに、総合的なコミュニケーション満足度は生活総合満足度や余暇活動総合満足度よりもレンジが大きく、生きがい得点に与える影響が大きいことが明らかとなった。

SCIに関しては、自身の健康状態満足度に次いでレンジが大きいことが分かった。また、地域愛着が高く地域活動を行っていることが高得点へ影響しており、地域愛着が低く地域活動を行っていないことが低得点に影響していることが示された。

そして、SNS利用に関する要素は今回の数量化 I 類モデルの説明変数にはならなかった。

(2) SNS非利用者の生きがい得点に関する数量化 I 類分析

SNS非利用者の生きがい得点に関する数量化 I 類分析の結果を図-6に示す。説明変数はSNS利用者と同様のものを用いた。

まず、世帯の経済状況満足度が最も影響力を持つ要素であることが示された。

次に、総合的なコミュニケーション満足度について見てみるとSNS利用者と同様に、満足であることが高得点へ影響しており、どちらでもない、不満であることが低得点へ影響していた。また、生活総合満足度や余暇活動総合満足度よりもレンジが大きく、生きがい得点に与える影響が大きいこともSNS利用者と同様の結果となった。

SCIに関しては、世帯の経済状況満足度に次いでレンジが大きいことが分かった。そして、地域愛着が高く地

域活動を行っていることが高得点へ影響し、地域愛着が低く地域活動を行っていないことが低得点に影響していることはSNS利用者と同様の結果であった。

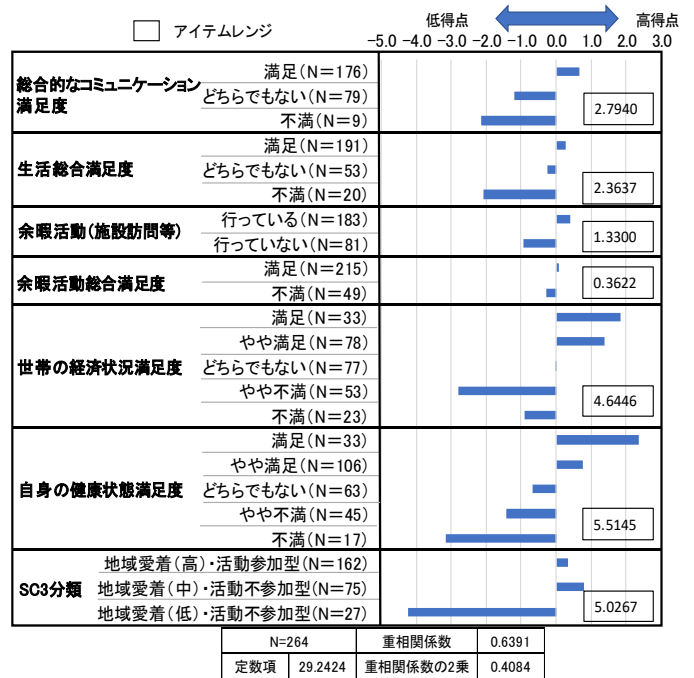


図-5 SNS利用者の生きがい得点に関する数量化 I 類モデル

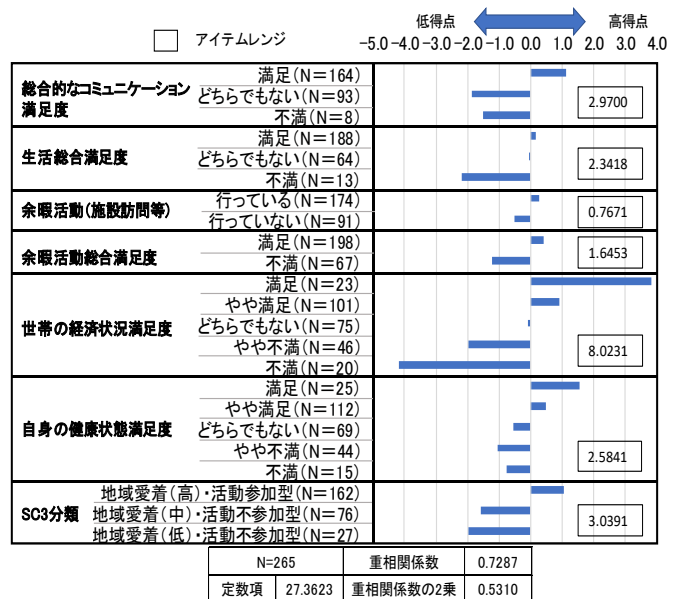


図-6 SNS非利用者の生きがい得点に関する数量化 I 類モデル

6. まとめ

(1) 本研究の結論

本研究では、コミュニケーションの中でもSNS利用に着目し、高齢者の生きがいとの関連性の把握を行った。

まず、生きがい得点に関して下位尺度得点を算出し、

その後クラスター分析を行うことで回答者を4つのクラスターに分類した。その後、生きがい得点に関する4つのクラスターと各要素のクロス集計を行うことで高齢者の生きがいと関連がある要素の把握を行った。

対面・テキストコミュニケーションと生きがい得点の関連性を見ると、統計的に有意な差が認められ、コミュニケーションの頻度が多いほど、コミュニケーションの満足度が高いほど生きがい得点が高いことが明らかとなった。また、コミュニケーション全般に関して総合的に満足していると生きがい得点が高いことが明らかとなった。

SNS利用と生きがい得点の関連性についても統計的に有意な差が認められ、SNS利用者の方が生きがい得点が高いことが明らかとなった。また、SNSの利用方法に関しても、閲覧だけでなく、投稿を行ったり、情報のシェアを行うなど、多岐にわたって利用していると生きがい得点が高いことが明らかとなった。さらに、SNSを積極的に利用し、相手考慮ができていると生きがい得点が高いことが示された。

そして、生きがい得点を目的変数とし、生きがい得点とのクロス集計で有意差が出た要素を説明変数とした数量化Ⅰ類分析により、高齢者の生きがい向上に関連する要素の把握をSNS利用者とはSNS非利用者に分けて行った。

SNS利用者では、自身の健康状況満足度が最も影響力を持つ要素であることが示され、SNS非利用者では、世帯の経済状況満足度が最も影響力を持つ要素であることが示された。総合的なコミュニケーション満足度について見てみると、SNS利用者とSNS非利用者に関わらずレンジが大きいことから、総合的なコミュニケーション満足度は高齢者の生きがいを構成する重要な要素であることが明らかとなった。なお、SNS利用者に関する数量化Ⅰ類分析の結果、SNS利用に関する要素は説明変数にはならなかった。

(2) 本研究の課題

本研究では、SNS利用と生きがい得点との関連性をクロス集計で示すことができた。しかし、SNSを利用しているから生きがいが高いのか、生きがいが高いからSNSを利用しているのかなど、詳細な関連性は把握できていない。また、数量化Ⅰ類分析ではSNS利用に関する要素が生きがいを説明する変数にならなかったことから、高齢者の生きがいとSNS利用の関連性についてさらなる分析が必要であると考えられる。

また、アンケート回答者の居住地や住んでいる周辺環境によって、SNS利用やコミュニケーションの生きがいとの関連性は異なってくると考えられる。今後は都市部と中山間地域や周囲に人が住んでいる地域とそうでない地域など、高齢者の居住環境に着目した分析を行い、

SNS利用やコミュニケーションの生きがいとの関連性の把握を行う必要がある。

謝辞：最後に本研究を遂行するにあたり、適切なご指導を頂いた橋本成仁准教授に深く感謝いたします。また、交通まちづくり学研究室の皆様にもたくさんのご協力、助言を頂きました。心より感謝いたします。

参考文献

- 1) 内閣府：令和元年版高齢社会白書（全体版）
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2019/zenbun/01pdf_index.html
- 2) 厚生労働省：平成 28 年版厚生労働白書—人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える—（本文）
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/>
- 3) 内閣府：平成 23 年版高齢社会白書（全体版）
<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2011/zenbun/23index.html>
- 4) 総務省：平成 30 年通信利用動向調査
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/190531_1.pdf
- 5) 総務省：平成 30 年版情報通信白書（PDF 版）
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/pdf/index.html>
- 6) 野村千文：「高齢者の生きがい」の概念分析，日本看護科学会誌，Vol.25，No.3，pp.61-66，2005.
- 7) 糸川美紀，堀田明裕：高齢者の生きがいデザインに関する研究，デザイン学研究，53 巻，第 1 号，p29-36，2006.
- 8) 今井忠則，長田久雄，西村芳油：60 歳以上の退職者の生きがい概念の構造，老年社会科学，第 31 巻第 3 号，p366-377，2009.
- 9) 長谷川明弘，藤原佳典，星旦二，新開省二：高齢者における「生きがい」の地域差，日本老年医学会雑誌，第 40 巻，第 4 号，p390-396，2003.
- 10) 岡本和士：地域高齢者における主観的幸福感と家族とのコミュニケーションとの関連，日本老年医学会雑誌，第 37 巻，第 2 号，p149-154，2000.
- 11) 広田すみれ：農村居住高齢者のコミュニケーション・ネットワークの分析，社会心理学研究，第 19 巻，第 2 号，p104-115，2003.
- 12) 大木慎，乾貴史，坂部倉一：インターネット上の対人交流が孤独感と QOL に与える影響，日本社会情報学会，第 26 回全国大会研究発表論文集，p.383-386，2011.
- 13) 澤岡詩野，袖井孝子，森やす子，荒井浩道：高齢者の非親族との電子メールを介した交流の特性，社会情報学，第 2 巻，第 3 号，2014.
- 14) 古谷嘉一郎，坂田桐子：対面，携帯電話，携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果：コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して，社会心理学研究，第 22 巻，第 1 号，p72-84，2006.
- 15) 岡本香，高橋超，親密度の違いおよびコミュニケーション形態の違いがメディア・コミュニケーション観に及ぼ

- す影響, 実験社会心理学研究, 第 45 卷, 第 2 号, p85-97, 2006.
- 16) 三浦麻子, 松村真宏, 北山聡: ブログにおける作者の指向性と内容・コミュニケーションとの関連, 心理学研究, 第 79 卷, 第 5 号, pp.446-452, 2008 年.
- 17) 松尾豊, 安田雪: SNS における関係形成分析—mixi のデータ分析—, 人工知能学会論文誌, 第 22 卷, 第 5 号, p531-541, 2007 年.
- 18) 石井健一: 「強いつながり」と「弱いつながり」の SNS—個人情報の開示と対人関係の比較—, 情報通信学会誌, 第 29 卷, 第 3 号, 2011.
- 19) 梅田恭子, 内藤祐美子, 野崎浩成, 江島徹郎: 大学生を対象とした SNS の Web 日記によるコミュニケーションの検討, 日本教育工学会論文誌, 第 31 卷, Suppl, p69-72, 2007.
- 20) 大竹恒平, 植竹朋文, 岡誠, 篠沢佳久, 櫻井彰人: SNS における新たな友人関係形成支援システムの提案—ソーシャルゲームを対象として—, ヒューマンインタフェース学会論文誌, 第 16 卷, 第 3 号, 2014.
- 21) 今井忠則, 長田久雄, 西村芳貢: 生きがい意識尺度 (Ikigai-9) の信頼性と妥当性の検討, 日本公衛誌, 第 59 卷, 第 7 号, 2012.
- 22) 近藤勉, 鎌田次郎: 高齢者向け生きがい感スケール (K-1 式) の作成および生きがい感の定義, 社会福祉学, 第 43 卷, 第 2 号, 2003.
- 23) 長谷川明弘, 宮崎隆穂, 飯森洋史, 星旦二, 川村則行: 高齢者のための生きがい対象尺度の開発と信頼性・妥当性の検討—生きがい対象と生きがいの型の測定—, 日本心療内科学会誌, 第 11 卷, 第 1 号, pp5-10, 2006.
- 24) Lawton, M. P. : The philadelphia geriatric center morale scale, A revision. Journal of Gerontology, 30, 85-89, 1975.
- 25) 樋口恵一, 安藤良輔, 福本雅之: 高齢者の活動と生きがい意識の関係性分析—豊田市の中山間地域におけるケース・スタディー—, 都市計画論文集, 第 51 卷, 第 3 号, 2016.
- 26) 原田祐輔, 望月秀樹, 下田信明, 森田千晶, 山口幸三郎: 訪問リハビリテーションを利用している地域在住脳卒中患者における生きがい意識と麻痺側運動機能に関する調査研究, 日本臨床作業療法研究, No.5, 72-79, 2018
- (?)

A STUDY ON THE RELATIONSHIP BETWEEN COMMUNICATION AND
PURPOSE IN LIFE OF THE ELDERLY
— FOCUSING ON THE USE OF SNS —

Seiji HASHIMOTO , Sota YAMASHITA and Haruka UNO

In Japan, "purpose in life" is mentioned as anxiety after retirement, and it is an urgent task to make life after retirement worthwhile. In addition, it has been revealed that people who have little frequency of conversation or communication among neighbors do not feel purpose in life.

In this study, we use the Sense of Life Awareness Scale (Ikigai-9) and focused on the use of SNS, especially in communication, to understand the relevance to purpose in life. First, we grasped the relevance between purpose in life score and each element, and confirmed that communication and the use of SNS are related to the score. The results of making a model using the score is overall communication satisfaction is an important factor of the purpose in life regardless of whether SNS is used or not.